

養護教諭養成における PCAGIP 法の活用と効果 (2)

— 評価尺度の作成 —

Utilization and Effect of PCAGIP in Yogo Teacher Training (2)

— Evaluation Scale for PCAGIP —

キーワード : PCAGIP 法 評価尺度 因子分析 養護教諭養成

Key Words : PCAGIP evaluation scale factor analysis yogo teacher training

内 藤 裕 子
Yuko Naito

要 約

本研究の目的は、前調査において項目を集めた PCAGIP 法の評価尺度について因子分析および信頼性の検証を行い、評価に影響を与える要因について検討することである。PCAGIP 法の実施と調査は養護教諭を目指す学生 46 人を対象とし、3 回のセッションを合わせたべ 111 人分のデータを用いた。最尤法・プロマックス回転を用いて因子分析を行なった結果、5 因子が抽出され「難しさ」「省察」「理解の深まり・広がり」「示唆」「受容的雰囲気」と命名された。5 つの下位尺度のクロンバックの α 係数は .75 ～ .84 を示し、高い信頼性が確認できた。セッションによる評価の違いを検討したところ、1 回目より 2 回目または 3 回目の評価が高くなり、「難しさ」の 1 回目と 3 回目の間に有意差が見られた。役割による違いについて検討したところ、1 回目は『金魚』より『金魚鉢』の評価が高かった。2 回目と 3 回目は『金魚鉢』より『金魚』の評価が高く、2 回目の「省察」「理解の深まり・広がり」において有意差が見られた。また、「受容的雰囲気」の評価が高い群は低い群に比べて「理解の深まり・広がり」「示唆」の評価が高かった。

Abstract

This study aimed to perform a factor analysis on and verify the reliability of the Evaluation Scale for PCAGIP, which comprises items determined in a preliminary survey, and to examine the factors that influence PCAGIP score. We implemented the PCAGIP and conducted the survey among 46 students of a yogo teacher training course and used data pertaining to all three sessions, representing a total of 111 individuals. As a result of the Maximum-Likelihood factor analysis, we extracted five factors and named them “difficulty,” “reflection,” “deepening/broadening understanding,” “suggestions,” and “accepting atmosphere.” The Cronbach’s alphas for the five subscales were in the range of .75–.84, indicating strong reliability. When we examined inter-session score differences, we found that scores were higher in session 2 or session 3 than in session 1. We also found a significant difference in “difficulty” score between sessions 1 and 3. When we examined differences by role, we found that scores for “kingyobachi” were higher than those for “kingyo” in session 1. In sessions 2 and 3, scores for “kingyo” were higher than those for “kingyobachi,” and we observed a significant difference in the session 2 scores for “reflection,” and “deepening/broadening understanding.” Compared to respondents with low overall scores for “accepting atmosphere,” those with high overall scores in this item gave higher scores for “deepening/broadening understanding” and “suggestions.”

I. はじめに

1. PCAGIP 法とは

PCAGIP (Person Centered Approach Group Incident Process) 法は、カール・ロジャースの Person Centered Approach の人間観を基盤とするエンカウンター・グループなどの PCA グループと、短い情報の提供に対して質問により問題や対応を考えていくインシデントプロセス事例検討法を組み合わせた方法であり、村山¹⁾によって開発された。「ファシリテーターと参加者が、安全な雰囲気の中でその相互作用を通じて参加者の力を最大限に引き出し、参加者の知恵と経験から事例提供者に役立つ取り組みの方法や具体策のヒントを見出していくグループ体験である。」と定義されている。メンバーは、ファシリテーター1人、事例提供者1人、白板記録2人、質問者は6～8人で構成し、その他のメンバーはコアメンバーを取り囲み、観察的に参与する。この方法では取り巻く人々を『金魚鉢』、それ以外を『金魚』と呼んでいる。

2. 先行研究

PCAGIP 法は実践事例の蓄積により特徴と意義が確立され、効果の仮説も導き出されている^{2) 3) 4) 5)}。また、2017年には、逐語録や自由記述アンケートから得られた質的データの分析によって効果を検討する研究^{6) 7)}、応用した方法を評定法で分析した研究⁸⁾、被災地の養護教諭に実践しエンパワメントとの関連を検討した効果研究⁹⁾が発表された。多様な視点やアプローチにより PCAGIP の研究は急進しているものの、参加者がセッションそのものを評価する実証的研究は今後の課題になっている。

筆者は2015年度より養護教諭免許取得を目指す学生を対象とし、4年次の後期に行われる教職実践演習の枠で養護実習の事例検討として PCAGIP 法を取り入れている。さらに、実施の評価を検討するために、振り返りの自由記述のデータをもとに内容分析を行い、質問項目を集めて質問紙調査を行った¹⁰⁾。データ数が少ないため平均値を求めて検討するとどまったが、質問紙調査によって自由記述では得られない全体的な評価が得られること、授業の目的である省察力の向上を促すプログラムであること、対象の準備性や事例の選択、ファシリテーターの力量がセッションに影響することが示唆された。今後の課題として、対象者の準備性に対する工夫点や、データを蓄積し質問紙を精査する必要性があげられた。

3. 本研究の目的

本研究においては、前調査から得られた課題への取り組みの一つとして、セッション後の質問紙調査のデータについて因子分析及び信頼性の検証を行い、PCAGIP 法評価尺度として精査することを目的とする。また、下位尺度を用いて評価に影響を与える要因について検討する。

II. 方 法

1. 対象

A大学養護教諭養成過程4年次の学生

2. 実施構造

2017年度は、教職実践演習の授業枠において3回実施した。A大学における養護教諭養成は心理学系学科において認可されており、学生は心理学の基礎的な知識を有しているものの、PCA グループの体験はほとんどない。実施方法は、初回のみレクチャーを実施し、ウォーミングアップを挟んで50～60分のセッションを行った。また、レクチャーの際に

は準備性を高めるために、PCAGIP の基本的な考え方である「結論がでなくてもヒントが得られれば良い」ことや「主役は事例ではなく事例提供者である」ことについて強調した。事前に全員に B 5 用紙 5 行程度の事例（養護実習中に悩んだこと、困ったこと、大変だったこと）を記述してもらい、適用しやすい人間関係に関する事例を選択した。事後には自由記述の振り返りシートを提出することとした。受講人数は、1 回目、2 回目、3 回目（以下 # 1、# 2、# 3 と表記）の順に 42 人、44 人、39 人であった。

3. 質問紙

前調査で項目を集めた質問紙（「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの 6 件法 20 問）の項目の中で、カテゴリー全体に影響を与えていた 2 項目の「解決の糸口」という表現を「ヒント」に修正した（資料 1）。

4. 倫理的配慮

受講した学生に対し、研究の目的および方法、個人情報保護、研究結果の公表、任意同意と同意の撤回について文書と口頭による説明を行い、質問紙の回答と振り返りシートのデータを使用することについて、同意書による同意を求めた。その結果、# 1、# 2、# 3 の順に、36 人、38 人、37 人のデータが分析対象となった。

III. 結 果

1. 因子分析

因子分析には 3 回のセッションを合わせたのべ 111 人分のデータを用いた。まず、20 項目について平均値を算出し天井効果および床効果を確認したところ、安心感に関する項目に偏りが見られたが、PCAGIP 評価を測定する上で欠かせない項目であると考えられたのですべての項目を分析の対象とした。固有値の衰退傾向から 5 因子が妥当である判断し、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。十分な因子負荷量を示さなかった（.40 未満）項目を削除し、再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った結果、5 因子が抽出された。因子パターンと因子間相関を Table 1 に示す。

第 1 因子は「結論が出なくてもややもやが残った」「質問だけで発表者を支えるのは難しいと思った」などの、この方法に対する評価として難しさを示す内容の項目からなり、「難しさ」と命名された。第 2 因子は「自分の経験と重ね合わせながら考えることができた」などの振り返る機会として評価している内容の項目からなり、「省察」と命名された。第 3 因子は「質問者のいろんな質問によって内容の幅が広がった」「質問が重なっていくことで事例への理解が深まった」などの、深く広く理解できたと評価している内容の項目からなり、「理解の深まり・広がり」と命名された。第 4 因子は「質問が進んでいく中で解決のためのヒントが徐々に見えてきた」などの、示唆的な効果を示す内容の項目からなり、「示唆」と命名された。第 5 因子は「温かい雰囲気が感じられた」などのグループの温かさや安心感を示す内容の項目からなり、「受容的雰囲気」と命名された。

また、下位尺度におけるクロンバックの α 係数は .75 ～ .84 を示し（Table 1）、高い信頼性が確認できた。

Table 1 PCAGIP 法評価尺度の因子分析の結果(最尤法・プロマックス回転)

	I	II	III	IV	V
第1因子： 難しさ ($\alpha=.82$)					
18 結論が出なくてもややが残った	.77	.02	.10	-.05	-.15
15 質問だけで発表者を支えるのは難しいと思った	.76	-.15	-.06	-.07	.23
16 この方法でよい方向にいくとは限らないと思った	.73	-.10	-.05	.14	-.04
17 解決のためのヒントとなるところまでもっていくのは難しいと感じた	.68	.11	-.08	-.15	.10
14 意見が言えなくてもどかしい気持ちがあった	.60	.11	.11	.06	-.09
第2因子： 省察 ($\alpha=.84$)					
8 自分の経験と重ね合わせながら考えることができた	-.05	.97	.06	-.08	.02
13 自分自身とリンクさせて考えることができた	-.01	.85	-.19	.09	.01
3 自分の経験を振り返り考える機会になった	.09	.58	.16	.03	.04
第3因子： 理解の深まり・広がり ($\alpha=.75$)					
11 質問者のいろんな質問によって内容の幅が広がった	.00	-.17	.74	.01	.02
4 質問が重なっていくことで事例への理解が深まった	.20	.12	.71	.05	-.07
6 自分とは違う考え方や見方を発見できた	-.07	.06	.60	-.02	-.07
1 様々な角度や思いつかなかった視点からの質問により理解が深まった	-.18	-.01	.58	-.02	.28
第4因子： 示唆 ($\alpha=.81$)					
9 質問が進んでいく中で解決のためのヒントが徐々に見えてきた	.05	.04	-.05	.85	.03
10 正解は出なくても十分にヒントや気づきを見出すことができた	-.08	-.05	.06	.75	.01
5 自分の中でヒントを見つけるということが理解できた	-.01	.05	.06	.65	.02
第5因子： 受容的雰囲気 ($\alpha=.76$)					
2 温かい雰囲気が感じられた	-.17	.02	-.05	-.05	.85
12 安心して話せる雰囲気があった	.19	.05	.03	.12	.76
因子間相関					
I	—	-.10	-.28	-.34	-.26
II		—	.30	.38	.11
III			—	.63	.46
IV				—	.30
V					—

2. 下位尺度得点

本研究においては、下位尺度の項目の平均値を算出し下位尺度得点とした。また、PCAGIP 法は毎回グループで起こっていることが異なるため、3 回のセッションを通しての下位尺度得点とセッション毎の下位尺度得点を算出した。

3. セッションと役割による違い

セッションや役割の組み合わせによって PCAGIP 法の評価がどのように異なるのかを確かめるために、3 回のセッションを通しての下位尺度得点を用い、セッションと役割を独立変数、5 つの下位尺度を従属変数とした 2×2 の分散分析を行った。役割とは、事例提供者と質問者と記録者とファシリテーターを含む『金魚』と、それに外側から観察的に参与する『金魚鉢』を意味する。セッションは # 1 ~ # 3 の 3 条件である。分析の結果、下位尺度の「難しさ」のセッションと、「省察」の役割について有意な主効果が見られた（それぞれ $F(2,102) = 5.63, p < .01$ 、 $F(1,104) = 4.11, p < .05$ ）ものの、どの下位尺度にも有意な交互作用は認められなかった。したがって、セッションと役割の要因について別々に検討することとした。

4. セッションによる違い

1・# 2・# 3 のセッションによる評価得点の違いを検討するために、1 要因の分散

分析を行った。分析の結果、下位尺度の「難しさ」においてのみ有意差が見られ ($F(2,105) = 3.44, p < .05$)、Bonferroni (5%水準) による多重比較を行ったところ、#1より#3の得点が有意に低い(評価が高い)ことが示された。また、有意差は出ないが、他の下位尺度においても#1より#2または#3の評価が高かった (Table 2)。

5. 役割による違い

『金魚』と『金魚鉢』の評価得点の違いを検討するために、セッション毎に、 t 検定を行った。#1においては、どの下位尺度にも役割間の有意差はみられなかったが、「省察」以外は『金魚』の評価が『金魚鉢』より低かった。#2においては、「省察」「理解の深まり・広がり」において役割間に有意差がみられ (それぞれ、 $t = 2.06, df = 17, p < .05, t = 2.31, df = 36, p < .05$)、他の下位尺度を含めて『金魚』の評価が『金魚鉢』より高かった。#3においては、どの下位尺度にも役割間の有意差はみられなかったが、すべての下位尺度において『金魚』の評価が『金魚鉢』より高かった (Table 2)。

Table 2 セッション毎の各役割の平均値と標準偏差

	#1						#2						#3					
	全体		金魚		金魚鉢		全体		金魚		金魚鉢		全体		金魚		金魚鉢	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
難しさ	3.38 ^A	0.96	3.75	1.46	3.26	0.75	2.93	0.92	2.42	0.72	3.09	0.92	2.80 ^B	1.02	2.51	0.72	2.89	1.09
省察	4.66	0.90	4.87	0.75	4.60	0.95	4.74	0.89	5.25 ^C	0.61	4.58 ^D	0.91	5.03	0.70	5.18	0.78	4.98	0.68
理解の深まり・広がり	4.94	0.63	4.90	0.66	4.95	0.63	5.15	0.54	5.44 ^E	0.37	5.06 ^F	0.56	5.02	0.65	5.27	0.61	4.93	0.65
示唆	4.54	0.69	4.37	0.91	4.59	0.63	4.64	0.59	5.03	0.69	4.52	0.51	4.75	0.77	4.92	0.68	4.70	0.80
受容的	5.12	0.83	4.75	0.92	5.23	0.79	5.34	0.71	5.61	0.41	5.25	0.77	5.24	0.67	5.45	0.68	5.16	0.66

A>B* C>D* E>F* * $p < .05$ $N=111$

6. 受容的雰囲気の影響

下位尺度の中に「受容的雰囲気」があるが、この尺度は「省察」「理解の深まり・広がり」「示唆」を下支えするPCAグループの核となる要素である。したがって、「受容的雰囲気」による他の尺度に対する影響を確認するために、受容的雰囲気の評価が高い群と低い群の群間の差を検討する。具体的には、各セッションの受容的雰囲気得点の平均-1SD以下を低群、平均+1SD以上を高群とする。#1の「受容的雰囲気」($M = 5.12, SD = 0.83$)においては低群が4.3以下、高群が6.0以上であり、#2の「受容的雰囲気」($M = 5.34, SD = 0.71$)においては低群が4.6以下、高群が6.0以上である。#3の「受容的雰囲気」($M = 5.24, SD = 0.67$)においては低群が4.6以下、高群が5.9以上である。平均値の算出より、#1の「省察」以外は、すべてのセッションの下位尺度において受容的雰囲気の高群が低群よりも評価が高いことがわかった (Table 3)。 t 検定の結果より有意差が見られたのは、#1における「理解の深まり・広がり」の群間差 ($t = 2.13, df = 17, p < .05$)、#2における、「理解の深まり・広がり」「示唆」の群間差 (それぞれ $t = 2.51, df = 22, p < .05, t = 2.71, df = 21, p < .05$)、#3における、「理解の深まり・広がり」「示唆」の群間差であった (それぞれ $t = 3.40, df = 16, p < .01, t = 2.82, df = 16, p < .05$) (Table 3)。

Table 3 受容的雰囲気の高群・低群の平均値と標準偏差

	#1				#2				#3			
	低群		高群		低群		高群		低群		高群	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
難しさ	3.91	1.10	3.25	0.65	3.37	1.33	2.98	0.88	2.85	1.01	2.45	1.06
省察	4.42	0.99	4.41	0.79	4.45	1.00	5.02	0.88	4.85	0.66	5.45	0.54
理解の深まり・広がり	4.53 ^A	0.60	5.16 ^B	0.63	4.75 ^C	0.37	5.28 ^D	0.53	4.67 ^G	0.53	5.47 ^H	0.45
示唆	4.14	0.42	4.41	0.65	4.20 ^E	0.30	4.75 ^F	0.67	4.38 ^I	0.55	5.21 ^J	0.63

A<B* C<D* E<F* G<H** I<J* **p<.01 *p<.05 N=111

IV. 考 察

1. 評価尺度の作成について

本調査では、前調査から得られた項目について因子分析することが可能となり、尺度の信頼性を確認することができた。しかし、課題として残っているのは妥当性の検討である。本尺度は参加学生の振り返りのデータと創案者の効果概念を基に作成されたが、エンパワメントなどの長期的な効果概念ではなく、セッションそのものに対する評価概念を意味する尺度となった。したがって、併存的妥当性を確認する外的基準の選定は困難が予想され、妥当性の確認の方法を探索する必要があると思われる。

また、今回の調査で、項目の表現について改善すべき点が発見できた。たとえば、「意見が言えなくてもどかしい気持ちをした」「質問だけで発表者を支えるのは難しいと思った」などの質問に未回答があった点である。これらの質問は、役割によってはどの立場から答えてよいのかわからなくなることが予想されるため、表現の修正や説明の必要性などを検討したい。

2. セッションによる違いについて

本調査においては、下位尺度の「難しさ」以外に有意差がでなかったものの、すべての下位尺度においてセッションの#1に比べて#2または#3の評価が高いという結果が得られた。内藤(2017)によれば、メンバーが一定していないグループ(7~10人)の継時的変化においては初回時の一回性のエンパワメント効果(事前と事後の差)が顕著であることが示唆された。一方、本研究の場合は全体のメンバーがほとんど固定されているため、回数が重なるごとに概ね評価が伸びていくことを推測していた。しかし、回を重ねるにつれ高くなるというわけではなく、下位尺度の「理解の深まり・広がり」と「受容的雰囲気」については、#2が最も高いという結果であった。このことについて考察すると、ファシリテーターの印象では3回の中で一番一体感が感じられ進み方もスムーズだったのが#2であったことから、セッションの内容が反映されたのではないかと考えられる。一方、セッション#1については、すべてのメンバーが初めての体験であったため「難しさ」を強く感じ評価が低くなったことが考えられる。

3. 役割による違いについて

一般的には、直接質問をして参与している『金魚』が、観察的に参与している『金魚鉢』より評価の高低が顕著に表れることが予想できる。本調査の#1においては、『金魚鉢』よりも『金魚』の評価が低かった理由として、初回の「難しさ」がより直接参与している『金魚』の評価に反映されたのではないかと考えられる。一方、一番スムーズに進んだ#2においては、直接参与している『金魚』の「省察」と「理解の深まり・広がり」の評価の高さが『金魚鉢』よりも顕著に表れたのではないかと考えられる。ただし、グループの成長

の展望を見据えた場合、役割によって評価差が生じない可能性も視野に入れておくべきであろう。

4. 受容的雰囲気の影響について

「受容的雰囲気」を高く感じた人については、他の尺度についても高評価が得られるであろうという仮説のもとに高低群の群間差を分析したところ、高群は低群よりも評価が高く、「理解の深まり・広がり」についてはすべてのセッションにおいて、「示唆」については#2と#3において有意差が認められた。このことより、PCAGIPが意図する効果概念を下支えするのは、PCAグループの中核概念である、グループで醸成される受容的な雰囲気であることが示唆された。しかしながら、現在「受容的雰囲気」の項目数は2つしかないので、「批判しない」「尊重する」「認める」などのキーワードを用いた項目を追加して因子分析を行い、要因となる中核概念を多義的にとらえていきたい。

まとめ

本調査で作成されたのは、PCAGIP法を評価する尺度であり、下位尺度の信頼性が確認された。評価に影響する要因として、セッション（回）、役割（金魚・金魚鉢）、受容的雰囲気の高低を取り上げて検討した。セッション（回）の要因として考えられたのは、初回に感じる難しさとセッションの内容であることが示唆された。また、『金魚』と『金魚鉢』の差についても、セッションの内容に影響されることが示唆された。また、受容的雰囲気が事例の理解や気づき（示唆）を促す要因になっていることが示唆された。このことより、セッションの内容と受容的雰囲気は重要な要因であるため、どのように評定するかが、尺度の妥当性の検討とともに今後の検討課題である。

謝 辞

データの使用にご同意いただいた学生みなさんに心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 村山正治・中田行重編（2012）新しい事例検討法 PCAGIP 入門ーパーソン・センタード・アプローチの視点から 創元社
- 2) 村山正治・石津寛子・金城総・仙石裕樹・坂元美和・柴田妙・則安総一郎・福山剛・増田仁美・松寄順子・三木北斗・村田裕美（2008）エンカウンター・グループとインシデントプロセスを組み合わせた新しい事例検討会（PCAGIP法）の実際（Ⅰ）ーPCAGIP法の実事例の報告ー 東亜大学大学院 心理臨床研究 8, 3-10.
- 3) 村山正治・江口尚子・衛藤萌・小埜優依・黒川明宏・立川隆一・久留玲子・前泊麻理菜・松田有加・三澤篤・山口瑞穂・奥原孝幸（2009）PCAGIP法の実実際（Ⅲ）ーPCAGIP法の実事例の報告と考察ー 東亜大学大学院 心理臨床研究 9, 3-13.
- 4) 村山正治・桑野浩明・津田優子・松本沙紀・木村友香・静間裕子・八丁春美・廣川望・東村通紘（2012）PCAGIP法の実実際（Ⅴ）ー2事例の逐語記録ー 東亜臨床心理学研究 11, 45-84.
- 5) 村山正治・池田紘子・大石沙耶香・北田朋子・新開佳子・杉浦崇仁・田中正江・中村加奈・古野薫・村上恵子（2013）PCAGIP法の実実際（Ⅵ）ー参加者の体験報告ー 東亜大学大学院総合学術研究科 心理臨床研究 13, 45-64.

- 6) 小野真由子 (2017) PCAGIP 法における効果の探索－事例提供者の体験に着目して－ 日本人間性心理学会第 36 回大会発表論文集 72-73.
- 7) 並木崇浩 (2017) PCAGIP の場に関する一考察－アンケートの質的分析を通して－ 日本人間性心理学会第 36 回大会発表論文集 74-75.
- 8) 押江隆・山根倫也・坂本和久・玖村奈美 (2017) 体験課程スケールによるリフレキシブ PCAGIP のプロセス研究 日本人間性心理学会第 36 回大会発表論文集 90-91.
- 9) 内藤裕子 (2017) 被災地に勤務する養護教諭のエンパワーマントを目的とした PCAGIP の実践と効果 日本人間性心理学会第 36 回大会発表論文集 88-89.
- 10) 内藤裕子 (2017) 養護教諭養成における PCAGIP 法の実践と効果 東北福祉大学 教職研究 2016, 45-57.

資料 1

アンケート調査

本日の PCAGIP 法事例検討会に参加して、現在のあなたの気持ちや考えにどの程度あてはまるかを、数字に○をつけてお答えください。

N O	質 問 項 目	1	2	3	4	5	6
		まったくあてはまらない	ほとんどあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	かなりあてはまる	非常にあてはまる
1	様々な角度や思いつかなかった視点からの質問により理解が深まった。	1	2	3	4	5	6
2	温かい雰囲気が感じられた。	1	2	3	4	5	6
3	自分の経験を振り返り考える機会になった。	1	2	3	4	5	6
4	質問が重なっていくことで事例への理解が深まった。	1	2	3	4	5	6
5	自分の中で解決の糸口を見つけるということが理解できた。	1	2	3	4	5	6
6	自分とは違う考え方や見方を発見できた。	1	2	3	4	5	6
7	その場にいる全員が一緒に考えるような一体感が感じられた。	1	2	3	4	5	6
8	自分の経験と重ね合わせながら考えることができた。	1	2	3	4	5	6
9	質問が進んでいく中で解決の糸口が徐々に見えてきた。	1	2	3	4	5	6
10	正解は出なくても十分にヒントを見出すことができた。	1	2	3	4	5	6
11	質問者のいろんな質問によって内容の幅が広がった。	1	2	3	4	5	6
12	安心して話せる雰囲気があった。	1	2	3	4	5	6
13	自分自身とリンクさせて考えることができた。	1	2	3	4	5	6
14	意見が言えなくてもどかしい気持ちがした。	1	2	3	4	5	6
15	質問だけで発表者を支えるのは難しいと思った。	1	2	3	4	5	6
16	この方法でよい方向にいくとは限らないと思った。	1	2	3	4	5	6
17	解決のヒントとなるところまでもっていくのは難しいと感じた。	1	2	3	4	5	6
18	結論が出なくてもやもやが残った。	1	2	3	4	5	6
19	自分なりの答えをみつけようとするのが大切だと思った。	1	2	3	4	5	6
20	質問を重ねていく中で全体像が明確になっていった。	1	2	3	4	5	6